

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所より地域との連携の中で、人権を大切に共に喜びあえる 信頼の介護を理念としてきた。理念の実践に向けて、職員は毎年介護目標を立てている。利用者、家族の意向を大事にして、支援に取り組み信頼関係の構築に努めている。	理念を玄関ホールに掲示し来訪者にも解るようになってきている。理念に合わせ職員で決めた年間目標も事務所内に大きく掲示し実践に当たっている。家族には利用契約時に重要事項の説明と合わせ理念の取り組みについて説明している。年度末に振り返りの時を持ち、話し合いの中で次年度の目標を決めている。全職員が理念、年間目標に対し同じ方向を向き支援に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設の一部はオープンガーデンとして開放している。恒例のサン祭りには、地域の多くの方々の参加がある。避難訓練に駆けて下さるご近所様は顔なじみになっている。季節の果物やお花の差し入れなど地域の人々との交流が続いている。また、利用者は地域公民館で開かれた文化祭に出かけている。	協力費を納め地域の情報もいただき一員として活動している。毎年恒例の8月の「サン祭り」は併設施設と合同で盛大に開催され、利用者家族、近隣住民、多くのボランティアなどの来場があり、盆踊り、スタッフやボランティアの出し物など、全員が参加し、楽しい時間を過ごしている。地域の文化祭に見学に出掛け楽しんでる。また、高校生の職場体験もあり、傾聴とゲームで利用者との交流の時間を持っている。傾聴やカラオケ、三味線等、多くのボランティアの来訪も定期的にある利用者で交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	職員は認知症サポーターとして、キャラバンメイトの活動を実践した。また、出前講座で地域の人々に、認知症の理解、支援の方法を学んでいただく機会があった。理事長は地域の講演会で、認知症の人の理解や介護の相談にのっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は併設の小規模多機能ホームと合同で年6回実施している。ホームの利用者の状況や行事の様子は、写真等参考にしながら報告している。会議の中で避難訓練を実施したり、サン祭り、クリスマス会に参加することで施設の状況を理解していただいている。会議での意見、要望は次に活かしている。	家族代表、ご近所の方、市地域包括支援センター職員、民生委員、法人関係者、ホーム関係者の出席で2ヶ月に一回開催している。活動報告、利用者の状況説明、行事の予定と実施報告、避難訓練などについて意見交換等が行われ、支援の向上に繋げている。防災訓練を運営推進会議に合わせ実施し出席者にも参加していただいている。会議録は開示され職員にも分かるようになっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議で施設の状況を報告している。また避難訓練、サン祭り、クリスマス会等、行事に参加して実際を確認していただいている。利用者の入居にあたり、情報、アドバイスを受けることもあった。職員は、介護相談員の役割を学ぶ機会を持ち、理解を深めて訪問を受け入れることが出来た。	待機者やショート利用者について市の担当者に相談したことがある。介護相談員の年3回の来訪があり、利用者と交わり口頭での報告がある。介護認定更新調査は調査員が来訪しホームにて実施している。市主催の介護教室に参加しており、定期的に開催される市主催のケアマネージャー会議にも参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアに努めているが、安全のため玄関は施錠している。利用者に点滴が必要な時は終始付き添い、声をかけながら抑制しないケアに努めた。転落の危険が予測される時には、ベットを外して布団を使用している。利用者が併設の小規模多機能ホームに自由に出かけられるように施設間で協力している。	身体拘束を必要とする利用者もなく、拘束のないケアに取り組んでいる。外出傾向の強い利用者があるが気を逸らしたり、外にお連れし対応している。玄関は安全確保のため事務所か玄関ホールに職員がいない場合は施錠している。併設施設と自由に行き来が出来るため、所在確認をきめ細かく行うよう心掛けている。身体拘束ゼロに向けた内部研修を年1回行い意識を高め取り組んでいる。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	人権を大切にすることを理念に掲げて取り組んできている。皮膚が傷つきやすくなった利用者のケアには、腕等は握らず、支えながら動かすことを決める等、職員は日ごろからケアや言葉遣いには意識して注意している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を活用している利用者がいた。後見人や家族の関わりを通して学ぶ機会があった。研修会の参加と施設内研修を実施して更に理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約内容の説明には、静かな環境で落ち着いた話が出来るように配慮している。質問や介護への要望を確認している。料金の改定など、変更のある時は文章でお知らせしている。また、解約の必要な状況では、家族の心配や負担が考えられるので、出来る限りの協力をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会がある時、職員は積極的に話す機会を持つようしている。行事や運営推進会議に参加の際にも、意見や要望を確認している。市の介護相談員の訪問、傾聴ボランティアの訪問時には、利用者一人ひとりと話をさせていただく機会がある。意見や要望はスタッフ会議で検討してサービスに反映している。	利用者の思いは言葉と態度で判断し、それに沿った支援に繋げるよう心掛けている。家族の来訪は週3回～月1回位あり来訪の際には細部に渡ってお話している。年1回家族会「里の会」を七夕の時に開催し、七夕飾りに短冊を飾り、ゲームを楽しみ、食事を開き交流を深めている。誕生会にも家族が来訪しお赤飯と3時のお茶にケーキでお祝いし、プレゼントをお持ちになる家族も多いという。ホームのお便り「サンだより」も毎月発行され、ホームの活動や「にやり・ほっと」等の情報を請求書に同封し家族に喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月実施しているスタッフ会議は、代表者を含めて全職員の参加を目標に決定している。項目を設けて意見や提案を出しやすくしている。職員が普段感じる不安や改善が必要と思うこと等から、活発に意見交換し解決することが出来ている。	月1回全員参加でスタッフ会議を開催している。会議開催中の利用者の支援については職員OGをお願いし、全職員が安心して会議に集中出来るようにしている。行事予定、報告、カンファレンス等々、活発な意見交換の場としストレスを溜めない職場作りに努めている。職員は年間目標の設定や自己評価を自身で行いスキルアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	理事長は、職員の意見や要望を前向きに検討して改善に努めている。職員が働きやすい環境作りに積極的に取り組み、利用者に関わる姿勢を示している。職場環境の良さは、職員の勤続年数に表れている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	全ての職員に研修を受けることを勧めている。希望する研修がある時は、それを優先している。研修報告はスタッフ会議時に行い、職員全員が確認して学びを共有している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	ケアマネージャー会議、研修参加時に交流し、情報交換する機会がある。同業者の施設見学や実習の受け入れもあった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入に当たり一番大切にしていることは、利用者本人が利用を納得しているか、家族に確認している。サービス導入が必要な理由を利用者本人に家族と職員が同じ説明をすることで、不安を少なくしている。利用者の様子を確認し、見守りや声掛けをして、不安や心配なことは何かを知り、安心して利用できるように配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族、利用者が共に納得し、施設入所が出来ることは、その後の利用者の生活において大事であることを理解していただいている。家族の状況や思いを受け止め、協力していただきたいことを明らかにして、力を合わせての関係作り心にかけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の意見や要望は重要なものとして受け止めている。ありのままを記録に残して、それを基に話し合いをしている。利用者と家族が望む生活に近づけられるように、意見や要望は最大限サービスに反映している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は利用者と共に過ごす年月の中で、支えられ教えられることの多いことを知っている。利用者のありがたい一言や、その笑顔に支えられていると感じる職員は多い。にやりほっとの取り組みを通して、利用者から教えられることがたくさんある。感謝の気持ちは言葉にして伝えている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との協力体制は、最も重要と職員は理解している。行事や誕生会、カンファレンスの参加、食事介助に訪れる家族や経過記録から日々の様子を確認している家族もいる。遠方で面会が少ない家族には、折に触れて手紙や電話で近況報告をし、安心してもらうとの返事をいただいている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	併設の小規模多機能ホームから入所した利用者が多い。施設間の交流や自由な行き来が出来ている。家に行ってみたい、知り合いに会いに行きたい等、希望のある利用者の思いを受け止め、機会を利用して、その希望を叶える支援も出来た。	民生委員、近所の方、友人の来訪が比較的多くある。併設の小規模多機能居宅介護事業所の利用日にホームの利用者に会いに見える方もいる。ホームの電話から家族に連絡を取られたり、欲しい物を買って物に出掛け帰りに馴染みの店で食事をされてくる利用者もいる。新しく入居された利用者が数名いるが、職員が中に入り席順等に配慮しつつ良い関係へと導いている。本年度から利用者より家族あてに年賀状を送る予定がある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者が、お互いに気持ちよく関わり合い支えあえるように、席を変えたりテーブルの配置の変更をしている。利用者や家族の要望に配慮して、気の合う利用者が一緒に過ごすことが出来る場を提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族からの問い合わせ、書類への協力、困り事の相談等、連絡がある時は出来る限りの協力、支援に努めている。利用が終了した利用者家族が訪れてくるその思いに添えるように努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者のほとんどが、自身の思いや希望を伝えることが出来ている。日々の生活の中で会話を重ね、その思いを表出する機会となっている。表情や動作からも確認できている。職員は情報交換し、希望の実現に向けている。	若干名を除いては言葉で自分の意思を伝えられる状況である。声掛けの中で質問する感じで問い掛けを行い、食事、洋服選び等、表情、動作からも意向を受け止めるように心掛けている。また、日々接する中で新たな発言、行動等の発見を「にやり・ほっと」にまとめ情報の共有をし希望に沿った支援に取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	個々の歴史や暮らし方、生活環境、サービス利用の経過について、出来るだけ情報をいただくように努めている。日々の暮らしの中で、本人から教えていただくことがある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	経過、ケア記録は一日を通して記入している。利用者の生活の様子、変化は記録から確認できる。センター方式、できる・できないシートを活用し把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画の作成はケアマネージャーが中心となり、利用者、家族から意見、希望、要望を確認している。ケアカンファレンス時に、全スタッフの意見を確認して計画に反映している。緊急な対応が必要な場合は、状況に応じた計画に修正している。	職員は3名ずつの3グループに分かれ、3名の利用者の居室担当をしている。介護計画作成は毎月のカンファレンスにおいて全職員が意見を出し合い、家族の希望も反映しケアマネージャー中心にプラン作成を行っている。短期目標は3ヶ月で、状態が安定している場合は6ヶ月での見直しを行っている。また、状態に変化が見られる時には随時見直ししている。現状入居間もない方がおり、きめ細かな状況把握に努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員はケアの実践の中で、利用者の言動などから気づいたこと、工夫したこと、次のケアにつなげたいことを個別の経過、ケア記録やケアチェック表に記録している。記録は職員全員が目を通している。他職員の記録からも情報を共有して、実践や介護計画の見直しにつなげている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者、家族の状況に応じて、必要な支援は可能な限り実施している。家族からの依頼を受けて、認定調査の申請、病院受診、不足品の購入等を実施している。遠方の家族に代わって、入院中のお見舞い、確認した病状を家族に連絡する等、サービスは無理のない範囲で出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の民生委員やボランティア、ご近所など、多くの力を借りて、楽しみのある暮らしの支援が出来ている。近隣のふれあいプラザからボランティア活動として、毎年訪ねてくるのが楽しみと話す女性学級の方々もいる。地域の公民館で開催する文化祭に出掛け、多くの方との交流も出来ている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は利用者や家族の希望で決めている。多くは利用開始前からのかかりつけ医を継続している。家族等からの依頼のある場合は、施設の協力医を紹介することもある。受診の付き添い、往診の依頼、看取り介護への協力の依頼等、かかりつけ医との連携を通して支援に当たっている。	利用者や家族の希望で入居前からのかかりつけ医を継続されている方が7名おられ、それぞれ住診と受診対応となっている。他の利用者はホーム協力医の受診対応で職員がお連れしている。管理者が看護師でもあり日々の健康管理と合わせ各主治医との連携を取り万全な医療体制を取っている。また、併設小規模多機能居宅介護事業所にも2名の看護師がおり、常時誰かが在籍し、連携を取りつつ進めている。歯科は必要に応じて近隣の訪問歯科の対応となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は常に利用者の健康管理や状態の変化に対応している。職員は体調の変化に気づいた時は、ただちに看護師に報告している。併設の小規模多機能ホームの看護師の協力は、支援を充実させている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は病院の指示、家族の意向に出来るだけ添うように支援している。利用者の状況に応じてのスムーズな退院支援を、地域連携室と連携を図りながら最大限努力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所で行えることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期のあり方は、サービス導入時に本人、家族に確認している。また、その時々状況に応じての意向を確認して対応している。看取りを希望する場合は、主治医と連携して協力を求められる体制を整えている。最後の時は、家族等の見守る中で迎えられることを念頭に職員一同で支援している。	重度化と終末期の指針がありホームとしての取り組みについては入居時に説明し家族の希望もお聞きしている。また、その状況に到った時に改めて意向を確認し、看取りを希望する場合は同意書を頂き、家族、医師と連携を取りつつホームとして出来る精一杯の支援に取り組んでいる。開設以来17名の看取りを行っている。家族の希望も聞きながら住み慣れた場所で家族に見守られ、最期の時を迎えられたことで感謝の言葉も頂いている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルに沿って、施設内学習をしている。職員から希望があり、吸引器の準備から実際までを繰り返し学ぶ機会を持ち、不安の軽減につながった。AEDの設置にあたり、消防職員から使用方法を学んだことで、緊急時に問題なく使用出来ていた。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は併設の小規模多機能ホームと合同で年2回、夜間の想定で実施している。運営推進会議日と合わせて実施することで、推進委員からの意見もいただき、反省は次回につなげている。スタッフ会議で、災害時の対応を話し合い、災害時の危険個所の確認と改善にも取り組んでいる。	年2回、5月と10月に運営推進会議に合わせ、併設小規模多機能型居宅介護事業所と合同で実施している。火災と夜間想定での避難訓練を中心に利用者全員参加で行い、併設施設へ移動後に外へ避難する訓練も行い緊急時の備えとしている。合わせて通報訓練、緊急連絡網の確認、年1回は消防署員参加でAEDの使用についての指導もいただいている。備蓄として米、味噌、水、トロミ材、オムツ類などが準備されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉がけや対応をしている	援助が必要な時、目立たずさりげない言葉がけで対応に心掛けている。難聴の方には、アイコンタクト、耳元でゆっくりとはっきり伝えるように努めている。職員は自己評価で、自身の介護を振り返り反省する機会がある。また、スタッフ会議で職員は、言葉がけや対応について話し合い、お互いに注意し努力している。	理念の中にあるように「人権」や「尊厳」に気配りし、言葉使いには特に気を使い、友達言葉に成らないように取り組んでいる。トイレ介助にも気を使い、声掛けは回りに解らないようお連れしている。呼び方は家族にもお聞きし、旧姓も合わせた希望に沿い、苗字や名前を「さん」付けでお呼びしている。プライバシー保護の内部研修としてマニュアルを全員で読み合わせ意思を統一し支援に当たっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の多くは日常的に希望や意思を伝えることが出来ている。難聴の場合は、耳元でゆっくり声をかけて、表情を確認し、伝わったかの判断にもしている。繰り返し質問されることを嫌う利用者には、名前を呼び掛けて意識してもらい「～はどうですか」と、答えやすさにも心掛けている。返事が無い時は表情を確認して判断することもある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「手伝うよ」と声をかけて下さる利用者にも、出来る手伝いをお願いしている。毎日「家に帰らなくて」と心配している利用者の側に寄り話を聞く。誰かが側にいて関わっているだけで、落ち着いた時間が過ごせている。暮らしに基本的な流れはあるが、利用者のペースを見守りながら対応に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみは本人の好みや意向により決めている。何度も着替えをしていることもある。その季節にあったおしゃれが楽しめるように、クローゼットの中の整理は支援している。本人が決められない場合は、その日の気温や状況に合わせて職員が選んでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好みや苦手な物を確認して、食べられない物は別の物に変更している。食べやすさ、むせることに対応して食事形態を変えている。テーブル拭きや、お茶の準備を手伝ったり、お盆拭きにも取り組んでいる。おかわりを希望し食事を楽しむ姿がある。職員は残さず食事をしてもらえたことに感謝の気持ちを伝えている。	自力で摂取できる方が多く、一部介助、全介助の方もいる。食事はのんびりと職員との会話を楽しみながら出されたものは完食している。献立は食事担当の職員3名が週ごとに考え、毎日スーパーで食材の買い出しをし、合わせ家族や職員からの野菜・果物の差し入れを使い調理している。また、誕生日には「赤飯と煮物」、七夕には「笹寿司」、クリスマスには「チキン」、正月には「おせち」等、季節の料理を楽しみ、更に、「ラーメン」、「お蕎麦」、「回転寿司」等の外食にも出掛けている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の希望を確認し、咀嚼や飲み込みの状況に合わせて食事の形態を決めている。利用者の状態により水分摂取量を記録している。食事摂取量の記録は、欠かさずに行い健康状態の把握と支援につなげている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは義歯の洗浄を含めて利用者の出来ない部分を補うようにしている。歯ブラシ、くるりナブラシ、歯間ブラシ、歯磨きティッシュなど、状態に合わせて利用している。口腔ケア研修を受けて、ケアの重要性を学んだ。歯の治療は利用者の状況により、歯科医の訪問、協力を得ている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	リハパンを利用している利用者の排泄のリズムの確認と利用者の様子を見逃さないことで、タイミング良くトイレで排泄する支援をしている。利用者に応じては、声がけやトイレの表示を工夫して、トイレでの排泄を支援している。	自立の方が三分の一で布パンツとパットを使い、一部介助の方も数名おり、リハビリパンツ使用で、全介助の方はオムツ使用という状況である。排泄ケアチェック表を使い、起床時、就寝時、及び一人ひとりのパターンに合わせ声掛けを行いお連れし、トイレでの排泄に繋げている。スムーズな排便ができるように朝食時のヨーグルト等の乳製品とバナナの摂取を勧めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取は起床時から一日を通して不足しないように心掛けている。毎朝食にバナナを取り入れている。おやつは乳製品や水分摂取に心掛けている。排便の確認および記録と下剤の調節をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は利用者の希望を確認して、気分や体調に配慮して行っている。清拭、シャワー浴、洗髪など状況に応じた支援が出来る。入浴支援に時間と複数の介護者が必要になり、全員が毎日入浴することは出来ないが、利用者の希望に配慮して支援している。入浴の声掛けに嫌がる利用者も、湯に入れば喜ぶので、一度断られても時間を置きすすめている。	全利用者が何らかの介助が必要な状況で、清拭で対応する利用者もいる。基本的に1日おきに週3回以上入浴を行っている。拒否の方もいるが職員を変え時間を変え対応している。浴室は比較的広く明るい造りとなっている。季節に応じ「ゆず湯」、「菖蒲湯」、「バラ湯」等を楽しみ、年2回、近くの温泉の「足湯」にも出掛け温泉気分を味わっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自由な休息の時間が過ごせるように、利用者の希望に添い支援している。室温等の室内環境や寝具の調整と清潔に配慮している。夜間は利用者の希望により、室内の明かりをつけたまま就寝してもらうことで、安心と安眠につなげている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の利用者が服用している薬の説明書は、ファイルにまとめて、いつでも確認できるようにしてある。服薬状況、薬の変更や追加は記録して全員が確認出来る。誤薬の危険性に対応して、声だし確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	男性利用者が増え、ビールを希望する利用者に対応して、ビアガーデン、ビアホールを開き、ノンアルコールを楽しむことが出来た。日常生活では、台所の手伝い、モップ掛け、花鉢の水やり、洗濯物たたみ等に取り組んでいる。新聞の記事を写し書きすることが日課になっている利用者には、場所の提供をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	行きたい場所を希望する利用者の外出支援に努めた。それが遠方の時は、車で出かけることもあった。希望した時、支援が出来るように勤務者が協力して希望に添う努力をしたが、無理な状況は説明し理解を求めることもあった。家族と外出の機会が多い利用者がある。お楽しみ外出を計画し、希望する外食を支援した。	外出時は自立歩行の方が三分の二ほどおり、車イス使用の方が三分の一という状況である。日常的には季節によりホームの周りを散歩している。年間行事計画の中でお花見、バラ公園の見学、人形博物館や紅葉狩り等に出掛け楽しんでいる。また、年4回お楽しみ外出で希望をお聞きし、ドライブを兼ね外食に出掛けしている。家族と外出する利用者もいる。	

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を管理して、甥や姪に小遣いを渡すことを楽しみにしている利用者がある。「お金がない」と困っている時は、金庫に預けてあることを説明し、不足な物、必要な物の有無を確認している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	敬老の日や誕生日に届く手紙やお祝いを嬉しそうに受け取る姿がある。希望に添い、電話で家族と話が出来るようにしている。また、「いつでも電話下さい」「一緒に介護しているつもりです」と家族の協力もある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂ホールでは多くの利用者が一日の大半を過ごしている。天窓からの陽の光が明るく、裏庭が広がり、開放感のある空間となっている。つるし雛や干支、四季に合わせた飾りつけをしている。ベットにもなるソファや畳コーナーで、居眠りをしたり昼寝をしている。TVを観て、気の合う人と話し、食事の献立表を見る楽しみのある場所になっている。空気清浄器を置き、室温や湿度にも配慮している。	一日の大半を過ごすリビングホールではハイパーゲームや季節の歌を職員と共に楽しむ利用者の姿が見られ、自由に思い思いの時間を過ごしている。共用部分は掃除が行き届き清潔感が漂っている。天井は高く明るく開放感がある。壁には職員、利用者それぞれの顔写真に一言コメントが添えられ紹介されている。合わせて職員が作ったつるし雛や季節に合わせた飾りつけが施されている。また、ソファや小上がりを含め、利用者がのんびり過ごせる空間を確保している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールで過ごす席は、利用者の希望に配慮している。家族の要望がある時、利用者間の関係で席を替える時は、カンファレンスで話し合い決めている。気の合う利用者が出るだけ一緒に過ごせるように、テーブルの位置にも配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	思い出の写真や手作りの置物等が置かれている。好きな動物や花等のポスター、ぬいぐるみを置くことで会話が增えている。ベット上に大事なものを沢山置き、安心して過ごしている利用者もいる。	入り口には可愛い犬や猫のポスターが貼られている居室がある。室内は洗面台と大きなクローゼットが設けられ暮らし易い作りとなっている。持ち込み物は自由にイス、テーブル、テレビ、また、家族の写真、動物のぬいぐるみ等も置かれ、利用者一人ひとりが自由に生活していることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせて、安全で使いやすいように、トイレや浴室の手すりの増設、畳コーナーをフローリングに変えている。トイレの案内表示は利用者に分かりやすく迷わない工夫をしている。車椅子の運転を妨げないように、障害物となるテーブルや椅子の位置に配慮している。		